

待望の超人　　ウサイン・ボルト

陸上界　久々の超人

私の陸上観の中で、最高のレースは1991東京世界陸上　男子100m決勝であった。スター・カールルイスが世界新記録での優勝。9秒8台への人類の突入。上位二人が9秒8台、上位6人が9秒台・・・鳥肌がたった。

ルイスは長きに渡り、100mで五輪や世界陸上で連覇という不可能に近いことを実行してきた。しかも「ベンジョンソン対決」や「3冠、4冠」、「世界新記録優勝」というドラマチックすぎる舞台を毎回用意してくれた。

また同じようにセルゲイ・ブブカやマイケル・ジョンソンも私の中で心動かされる存在だ。彼らは「金メダル」しか持っていない。

スーパースターの資格として、優勝しなければ意味がないという哲学なのだろう。

10年以上という異常に長い期間をトップで君臨。3位や7位入賞でいいならもっと長く競技生活が出来たろうが、それは選択しなかった。

幾度も引退や故障の危機にさらされながら、必ず大舞台では勝つ！ジョンソンに至っては「世界大会の決勝」で望みどおり「世界新記録」を出す。

期待され、心配され、全世界が見守る中で「勝つ」。

これが孤高のスーパースター、超人（鳥人）というものだ。

当初多くの番組で放送されたように、北京の100mはアメリカのタイソン・ゲイ、ジャマイカのパウエル、そして心境著しいボルトの三強争いであろうと思っていた。しかし始まる前の私にとっては、まるで対岸の火事。さして昂ぶりも無い。なぜなら100mに限らず、先述したような「王者」たる選手が現在見当たらないのだ。（あの100m決勝を観るまでは・・・だが）

スター不在最大の理由は、技術解析が進んでマニュアル化し、国際的な選手なら「そこそこの記録」を多くの選手が出せるようになったためであろう。したがって層は厚くなったが、飛びぬけた「規格外」の選手が誕生しにくいのだと思う。

かつては、その選手の「センスのみ」が大きく生かされたため、個性色に富み、平均を逸するような競技者が多かったのだ。

いわゆる「天才・怪物」だ。現在の世界陸上界は、小粒だが平均化して良質。ホームラン的当りはなし・・・といったところか。

100mをはじめ短距離も記録短縮の科学的解析がなされたおかげで、2年サイクルほどの「こじんまり」としたトップ交代が続いていて、「不滅の記録」というものは出なくなった。「歴史に残る名場面」というものは減っていると思う。記録更新は「ローカルレース」で生ま

れ、五輪や世界陸上の決勝ではないのである。個人的な印象では、マイケル・ジョンソンのアトランタ200m、セビリア400mが最後であろうか。跳躍に至ってはさらに辛辣で、世界記録を期待させる名勝負など全く見られない。20年以上前と何も変わらない(あるいは後退した)優勝記録で、印象が薄くチャンプの名前すら覚えられない。

しかし今回のボルト選手のパフォーマンスには、久しぶりに衝撃が走った。私にとってもそうだが、陸上界にとっても待望のスーパースター誕生ではなかろうか。

### 「競争相手がいないほど」の強さ

準決勝の時点で優勝はボルトであろうと誰もが確信したが、そのタイムは驚くべきものであった。

二次加速あたり(60m)で力を抜き、まさに「流して」9秒85!・・・ちょっと前の世界記録だ。

伊東解説者に言わせると、

「本来、流すというのは、見た目ほどスピードが落ちない。私の10秒00のときもそうだった。しかし彼の場合はあきらかに減速しているし横を見て歩幅を短く、止まる動作だ」・・・と。

過去にも「ラストを歓喜して流した」好記録というのは多い。

1992年バスセロナ五輪の200m準決勝、マイク・マーシュも流して19秒72の世界タイ記録。決勝では優勝したものの、記録はそれを越えられなかった。ルイスでさえ200mラスト20mをバンザイしながら出した19秒75が結局彼のベスト記録。400mHではバルセロナ五輪でケビン・ヤングが、やはりバンザイをしながらマークしたのが現在の世界記録である。前100mの世界記録であるアサファパウエルも9秒74は準決勝でマークしたものであった。

このように準決勝や、優勝を確信した「リラックス」の中でマークされる好記録は珍しくない。

しかし、レースの半分しか加速せず、ピッチもストライドも落として「9秒85」・・・というのは観たことが無い。いったい本気になったらどれくらいのスピードが出るのか・・・

パウエルもトップ通過したが、メンタルで弱すぎるのは明確。過去にはメジャータイトルは無い。勝負力ではタイソン・ゲイもあると思ったが、故障上がりで10秒すら切れない。しかし今回は落選したがタイソン・ゲイはストイックで礼儀正しく、スターの資質あり。好きなタイプである。

あとはボルトの記録のみが話題となった。

## 驚愕の決勝

いまさら語るまでも無いので、結論から言おう。  
決勝でさえ、70mまでしか本気にならなかった。  
60mで完全に勝負がついたからだ。  
圧勝。  
そして9秒69。  
さらには、向かい風だった。

明らかにショーパフォーマンスランであった。  
実況アナウンサーは、それを「欽ちゃん走り」と表現した。  
伊東浩二さんは同じスプリンターとして、驚いた反面、少々苦々しく思ったようで  
「……うん新記録には間違いないのですが……最後は減速していますね……あれで走りきっていてくれれば、9秒6の半ばは確実に出たでしょうに……」と「もったいない……」というニュアンスで解説していた。  
確かに最高の舞台で世界記録が出せるシーンなど、人生でそうあるものではないだろう。  
もしボルトが今後、故障続きで記録は伸びなくなったら……「あの9秒69の時ちゃんと走りきっていれば……」と惜しまれないよう願う。

### 陸上男子 100m 決勝

順位	国名	選手	記録	備考
1	 ジャマイカ	ウサイン・ボルト	9.69 (世界新記録)	
2	 トリニダード・トバゴ	リチャード・トンブソン	9.89	
3	 米国	ウォルター・ディックス	9.91	
4	 オランダ領アンティ ル	チュランディ・マルティナ	9.93	
5	 ジャマイカ	アサファ・パウエル	9.95	
6	 ジャマイカ	マイケル・フレーター	9.97	
7	 トリニダード・トバゴ	マーク・バーンズ	10.01	
8	 米国	ダービス・パットン	10.03	

## 米国

マイケル超え？

やはり100mでのゴールが全世界的に不評だったのか、「200mでは走りきる！」と公言する異例の珍コメントまで出た。

当然、次の興味の焦点は「マイケル・ジョンソン超え」だ。

アトランタ五輪で19秒32という、とてつもない記録が出てから12年。  
200mで19秒台後半スプリンターは増えたが、届きそうも無い。  
伊東解説者をして「今世紀は破れない記録」とまで言わしめた200m400mの世界記録。

元来、ボルトは200mの選手。1m96cmの体格ながらコーナーのバランスセンスも素晴らしいのであろう。19秒93のジュニア記録も保持している。

決勝は無風。

100m同様に60m付近ではすでに大きく飛び出していた。  
巨体から強い遠心力がかかろうものだが、それを支える技術、センスのほうが優れているの  
だろう。さすが南米の血統だ。

直線に入ると差は開く一方だ。

アナウンサーが叫んだ「アメリカ勢3人が束になってもボルトを止められない。」

圧倒的な差。マイケル・ジョンソンの400mを思わせる。  
しかも追っているのはスピアモン、クロフォードら歴代のチャンピオンだ。  
遅いはずがないのだ。  
20秒を切るくらいでは勝負にならないほど、力の差は歴然だった。

公約通り、ボルトは必死に走りぬいた。

スタンドは驚きの声に包まれた。

速報は19秒31で止まっている！！

0.01秒ずれても世界タイ記録は期待できる。

結果は「19秒30」！！！！

驚異の世界新記録だ。

スタジアムは割れんばかりの大歓声に包まれた。

2着以下に誰が入ったか全く観ていなかった。

この2位争いこそが、いわゆる通常の世界大会の決勝だ。

・・・ボルトのあまりの速さが珍事を生んだ。なんと決勝で2名もがインレーンで失格の憂き目にあったのだ。世界のファイナリスト常連さえも、慌てふためかせる走りであったのだ。追っても追っても差は開く一方というレースを、ファイナリスト達は経験したことが無いのではないだろうか。

マイケルジョンソンの時は最後までナミビアのフレデリックスが追走して19秒6をマークしたが、今回は誰も追えなかった。

それでも3位までが19秒台となる好レースであった。

### 男子 200m 決勝

順位	国名	選手	記録	備考
1	 ジャマイカ	ウサイン・ボルト	19.30 (世界新記録)	
2	 米国	ショーン・クロフォード	19.96	
3	 米国	ウォルター・ディックス	19.98	
4	 ジンバブエ	ブライアン・ジンガイ	20.22	
5	 英国	クリスティアン・マルコム	20.40	
6	 セントクリストファー ー・ネビス	キム・コリンズ	20.59	
	 オランダ領アンティ ル	チュランディ・マルティナ	失格	
	 米国	ウォラス・スピアモン	失格	

ジャマイカ初尽くし

意外にもジャマイカでの五輪100m制覇はボルトが初である。200mではドン・クォーリーの1972年ミュンヘン五輪優勝が唯一の短距離の金メダルだ。もちろん400mRも1600mRも優勝は過去にない。

ルイスを筆頭に、あのベン・ジョンソンもバルセロナ五輪優勝のイギリスのリンフォード・クリスティもルーツはジャマイカにあるという。マリーン・オッティを筆頭に女子では現在ジャマイカ天下ではあるが。つまりは非常に優れた俊足のDNAを有しながら男子で一度も五輪を勝っていないのは、のんびりとしたお国柄のせいなのか……。

これを書いている時点で400mR決勝は行われていないが、100mファイナリスト3人、9秒7、9秒6をかかえてもし負けるようなら、それこそ「お国柄」としかいいようがないだろう。

いずれにせよ陸上界が待ちに待ったスーパースターが誕生したのは間違いない。  
ゲーム好き、ダンス好き、寒いのが嫌いなのでアメリカ留学はしない……というボルト。

今後はチャンピオンとしていかに競技に取り組むかが、本当のスーパースターか一発屋かの評価を二分するであろう。

15歳で世界ジュニア優勝。200mジュニア記録保持者。そして世界新記録でルイス以来の二冠達成。……肩書き条件は全て整った。今後はクール&ストイックに10年間「新・超人伝説」を作ってもらいたいものである。

高 37回 のもと歯科クリニック